

原 著

続発性リンパ浮腫を有する女性患者の弾性着衣による影響と改善の工夫

木村恵美子¹⁾, 城丸瑞恵¹⁾, 松浦有沙²⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 中村記念病院

目的：研究目的は乳がん・婦人科がん治療後の続発性リンパ浮腫患者が体験している弾性着衣の使用に伴う影響と改善の工夫を明らかにすることである。

方法：乳がんまたは婦人科がんの治療後、続発性リンパ浮腫と診断され弾性着衣を使用している女性患者6名に対し半構造化面接を用いて質的帰納的分析を行った。

結果：弾性着衣による影響は6つのカテゴリが抽出され、着用による【手指や関節への負担】【皮膚への負担】といった身体的影響、【日常生活への支障】【着用継続による経済的負担】【着用による安心感】等といった日常生活への影響が挙げられた。改善の工夫は7つのカテゴリが抽出され、【着用時の引き上げを楽にする】【疼痛を緩和する】【皮膚を保護する】【暑さに対処する】【睡眠時の負担を軽減する】等であった。考察：弾性着衣は身体的苦痛や心理社会的苦痛に繋がる可能性があるため、患者の改善の工夫を尊重した個別対応が重要である。

キーワード：乳がん患者、婦人科がん患者、弾性着衣、続発性リンパ浮腫

Influence of wearing compression garments on female patients with secondary lymphedema and efforts to improve the influence

Emiko KIMURA¹⁾, Mizue SHIROMARU¹⁾, Arisa MATSUURA²⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Nakamura Memorial Hospital

Purpose: This study aims to identify the influence of wearing compression garments on female patients with secondary lymphedema after treatment for breast and gynecological cancers, and the efforts this population make to improve the influence.

Methods: We performed a qualitative inductive analysis by using semi-structured interviews with six female patients diagnosed with secondary lymphedema and wearing compression garments after treatment for breast or gynecological cancers.

Results: For the influence of wearing compression garments, the analysis identified six categories including physical influences such as “burden on the hands, fingers, and joints” and “burden on skin” due to wearing the compression garments, and the influence on daily life such as “hindrances in everyday life,” “great expense involved in continued use,” and “sense of ease when wearing the garment.” For the efforts to improve the influence, the analysis identified seven categories including “trying to make it easier to pull up the garments during the wearing,” “relieving pain,” “protecting the skin,” “coping with heat,” and “reducing the burden in sleeping.”

Discussion: Compression garments can cause physical and psychosocial distress. This makes it important to respond individually to users, respecting the efforts made by female patients to improve the influence of the garments.

Key words: Breast cancer patients, Gynecological cancer patients, Compression garments, Secondary lymphedema

Sapporo J. Health Sci. 13:25-31(2024)

DOI:10.15114/sjhs.13.25

I. 緒言

卵巣がんや子宮がんなどの婦人科がんは女性特有のがんであり、乳がんは女性のがん罹患数が最も多く全体の22.5%を占めている¹⁾。これらのがん治療において手術後のリンパ浮腫は長年課題であったが、近年乳がん手術ではセンチネルリンパ節生検が標準化され、術後のリンパ浮腫は減少しつつある²⁾。一方で、続発性リンパ浮腫の罹患リスクは、がん治療薬であるタキサン系薬剤の使用³⁾や手術後の放射線治療⁴⁾によって高まることが報告されており、リンパ浮腫の発症リスクは変わらず続いているといえる。リンパ浮腫の発症要因は多様であるが、発症した患者は患肢の疼痛や重たさ、皮膚の炎症などの身体症状のみならず、ボディーイメージの変容や日常生活活動の低下など心理社会面にも影響を及ぼす⁵⁾ため、その管理は重要となる。

わが国のリンパ浮腫の治療では、2008年からリンパ浮腫指導管理料や弾性着衣・弾性包帯の保険適用が開始された。その後も診療報酬が改訂され、リンパ浮腫複合的治療料の算定⁶⁾も加わり、治療環境が整備されつつある。治療の第一選択となる弾性着衣や弾性包帯による圧迫療法⁷⁾は、保険適用となり以前より経済的に入手しやすくなった反面、正しく着用しなければ浮腫を悪化させ⁸⁾、皮膚損傷に繋がることもある。そのため、弾性ストッキングのメーカーの有無による正しい着用介助の検討⁹⁾や圧迫が困難な患者に対し筒状包帯とウェーブスポンジ併用による弱圧圧迫療法の検討¹⁰⁾など様々な視点で弾性着衣の検討が行われているが、着用による影響を患者の視点で検討した研究は見当たらない。リンパ浮腫の単独の治療法として効果が示されている弾性着衣¹¹⁾に対し、実際に着用している乳がんと婦人科がんの両患者からその影響や改善の工夫について医療者が理解することは、リンパ浮腫で弾性着衣を使用している女性患者の生活支援方法の検討に寄与できると考える。

II. 研究目的

本研究は、女性のがん患者が治療後に患う続発性リンパ浮腫として多い乳がんと婦人科がんの2疾患に着目し、女性患者が体験している弾性着衣の使用に伴う影響と改善の工夫を明らかにすることを目的とする。なお、本研究での影響とは「弾性着衣着用に伴う変化」とし、改善の工夫とは「弾性着衣着用に対して自らが実施している手段や方法、またはそれらを見つけようと考えをめぐらすこと」とした。

III. 研究方法

1. 研究参加者・募集方法

研究参加者は、乳がんまたは婦人科がんの治療後、続発性リンパ浮腫と診断され弾性着衣を使用している女性患者6名とした。参加の募集は、乳がん・婦人科がんのA患者会の会員に対し、本研究の趣旨について書面を基に説明し、研究協力を得た。

2. 調査期間

2019年7月～12月

3. データ収集方法

半構造化面接を1人につき1回で、30～60分程度行った。面接ではインタビューガイドを基に①属性（年代、病名、手術日、リンパ浮腫発生時期、弾性着衣の着用状況）、②弾性着衣の使用に伴う影響、③弾性着衣の使用に対する改善の工夫について聴取した。面接内容は同意を得てICレコーダーに録音した。

4. データ分析方法

データは質的帰納的に分析した。面接後の語りを逐語録にした後、「弾性着衣の使用に伴う影響と改善の工夫」に関わる語りを抽出し、意味を損なわないように留意してコード化した。その後は、以下の手順で分析した。①各参加者のコードを着用による影響と改善の工夫に分類し、一覧表を作成した。②各コードを類似性と相違性に留意しながら分類してサブカテゴリとし、抽象度を上げてカテゴリを抽出した。

また、分析結果の厳密性を高めるために、共同研究者とコード名、サブカテゴリ名、カテゴリ名が研究参加者の発言の意味を適切に反映できているか検討した。

5. 倫理的配慮

本研究は、札幌医科大学倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号1-2-2）。研究参加者には、研究目的、方法、個人情報保護、データ管理方法、研究成果の公表などについて書面を用いて説明した。特に、研究の参加は自由意思であり、途中での中断や参加の拒否が可能で、参加を断ることによる患者会内での関係性の変化や不利益を被ることはない旨を説明し、同意を得た。

IV. 結果

1. 研究参加者の背景（表1）

研究参加者6名は、乳がん患者が40～70歳代の4名で術後1～10年、リンパ浮腫発症後半年～9年であった。婦人

表 1 研究参加者の背景

参加者	年齢	病名・治療	手術時期	リンパ浮腫発生時期	発症部位	弾性着衣の着用状況
A氏	60代	右乳がん術後	9年前	術後3～4ヶ月	右上肢	日中：スリーブと指先有グローブ 就寝：未着用
B氏	50代	左乳がん術後 (術後化学療法・放射線療法)	6年前	術後8ヶ月後	左上肢	日中：スリーブ 夜間：弾性包帯
C氏	40代	①右乳がん術後 ②右乳房リンパ郭清術 (術後化学療法、ホルモン療法)	①1年前 ②9.5ヶ月前	②術後2.5ヶ月	右上肢	スリーブ+弾性包帯(2枚)
D氏	70代	①右乳がん術後 ②左乳がん術後 (術後化学療法、放射線療法)	①14年前 ②10年前	②術後1年 (①はなし)	左上肢	スリーブ
E氏	70代	子宮体がん全摘術後	29年前	術後3～4年	右下肢	日中：つま先開放フルストッキング +包帯 夜間：未着用
F氏	40代	卵巣がん全摘術後 (術後化学療法)	7年前	術後1ヶ月 (両下肢と腹部)	両下肢 腹部	つま先無開放のフルストッキング

科がんは40歳代、70歳代の2名で、術後7～20年、リンパ浮腫発症後7～25年であった。

2. 続発性リンパ浮腫患者の弾性着衣の使用による影響と改善の工夫

研究参加者の語りの分析結果について、カテゴリを【 】, サブカテゴリを< >, 語りの例を「斜体」、語りの補足を()で示し、以下に述べる。

1) 弾性着衣の使用に伴う影響 (表 2)

弾性着衣の使用に伴う影響では、【着用による手指や関節への負担】【着用による皮膚への負担】【着用による日常生活への支障】【着用継続による経済的負担】【着用による安心感】【配色に対する外観性への期待】の6つのカテゴリが抽出された。

【着用による手指や関節への負担】は、弾性着衣を着用し続けることや引き上げ動作に伴う手指・関節の負担の増大や痛み・つらさなどの苦痛を示している。参加者は、「ずっと圧迫されているせいかな肘がちょっと痛いかなって、色々薬は飲んでるので(中略)これ(弾性着衣)ばかりのせいではないとも思うけど」など着用し続けることによる関節の負担や、「(弾性着衣の引き上げ時は)爪がひっくり返りそうになります。毎回、こういうキツイのしているからなんでしょうけど」などの着用動作に伴う手指のつらさ、「ヘバーデン病(結節)は絶対きっとこの圧迫ストッキングのせいだと思うんです。(中略)手を壊すなど思っていた」と着用を繰り返すことによる手指の疼痛を体験していた。また、「(弾性着衣が)湿っちゃったりするとやっぱり上げにくいっていうのもあるし、(中略)そうすると手に余計に負担がかかる」などの汗による着用動作時の手指の負担を語っていた。

【着用による皮膚への負担】は、弾性着衣の着用によって生じる皮膚への直接的影響を示している。参加者は、「(弾性)

スリーブがあたるところの皮膚が硬くなって、(中略)擦れて、痛い」と摩擦による皮膚の硬結や、「(弾性)ストッキングで膝にしわができると食い込んで痛い」などの動作による皮膚への食い込み、「足がとにかく粉がふくってというか、乾燥していくら保湿クリームでケアをしようが、何しようが酷くて」など皮膚への負担とトラブルを経験していた。

【着用による日常生活への支障】では、弾性着衣の着用が及ぼす暑さや時間的な負担、運動制限による不便さなど日常生活への影響を示している。参加者は、「夏のひどい暑さでやる気も失せた」と着用による異常な暑さや、「朝の10分ってというか、出かける前の10分で、今日は(弾性着衣を着用しなくて)いいやっていう時もありました。(中略)10分もったいないなと思って」などの着用時の時間的負担と面倒ささを語っていた。また、「(洗濯は)手洗い。面倒ですけど慣れました。そんなに時間かけてやらなくても毎日のことなのでチャチャってやるだけで、でも面倒」と手洗い洗濯に伴う不便さを体験していた。さらに、乳がんの参加者は「主婦だと水を使う(家事の時に弾性スリーブが濡れてしまう)し、腕も曲がらなくなるのでとても不自由だった」などの腕の運動制限に伴う不便さを語っていた。

【着用継続による経済的負担】では、参加者は「何万もの出費になっちゃうので、なんかそこまでお金をかけたくないというのが正直なところあるんです」など、弾性着衣の着用を継続することへの経済的負担について語っていた。

【着用による安心感】は、着用することで気持ちが落ち着き、安心に繋がっていることを示しており、参加者は「安心じゃないけど、(弾性着衣を着用していると)ビシッとなり、してないとなんとなく心もとないような」と語っていた。

【配色に対する外観性への期待】は、外観的なおしゃれへの期待といった着用による心理的变化を示しており、参加者は、「色は、(中略)やっぱり色々ある方がなんか楽しめるのかなって」と語っていた。

表2 弾性着衣の使用に伴う影響

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード
着用による 手指や関節 への負担	着用し続けることによる関節への負担	・薬剤の副作用かもしれないが、肘がスリーブでの圧迫で少し痛い (C氏)
	着用動作に伴う手指のつらさ	・(右手の弾性着衣を) 上げる時に左手全体がづらい (A氏) ・きついスリーブをしているため着用時に指爪が剥がれそうになるが、痛みはない(B氏) ・履く時に手指の先がつかなく、つま先から踵を入れるまでが一番大変である (E氏) ・購入したばかりのスリーブは伸びてないから履くのに苦労する (D氏)
	着用を繰り返すことによる手指の疼痛	・ヘバーデン病 (結節) を発症したのは、ストッキングのせいだと思う (E氏)
	汗による着用動作時の手指の負担	・夏は汗で特に上げづらい (D氏) ・排泄後や着衣が湿っていると上げづらく、手に余計な負担がかかる (F氏)
着用による 皮膚への 負担	摩擦による皮膚の硬結	・摩擦によって皮膚が硬く、痛くなる (C氏)
	動作による皮膚への食い込み	・手首の底背屈動作によって、輪ゴムで締め付けられたような違和感がある (B氏) ・料理時には(腕を動かすことが多いため) スリーブで肘が痛くなる (C氏) ・膝にストッキングのシワができると食い込んで痛い (E氏) ・夏はグローブに汗が溜まって痒くなる (A氏)
	皮膚への負担とトラブル	・皮膚が蒸れる (C氏) ・皮膚が赤くなり、湿疹がでる (C氏) ・皮膚の乾燥が強くなり、別のメーカーに変更した (F氏)
	着用による異常な暑さ	・着用による暑さでやる気が失せる (B氏) ・一生懸命スリーブを我慢して着用しているが、異常な暑さの時はずっとできない(B氏)
着用による 日常生活への 支障	着用時の時間的負担と面倒くささ	・スリーブ・グローブは身体の一部ではあるが、面倒くさい (A氏) ・朝出かける10分がもったいない、今日はいいやと思ひ、スリーブをつけないこともある(B氏)
	手洗い洗濯に伴う不便さ	・(スリーブを) 手洗いするのは面倒だけれども慣れた (C氏)
	腕の運動制限に伴う不便さ	・主婦なので日中は水仕事をする(時にスリーブが濡れてしまう) し、腕が曲がらなく不便である (B氏) ・書字時にペンが上手く持てない (C氏)
着用継続による経済的負担	着用を継続することへの経済的負担	・一生着用することを考えると交換しなければいけないが、1枚が高額である (C氏) ・2枚目以降も保険適用であって欲しい (C氏) ・年に4枚購入できるが、事務手続きが大変で、面倒である (D氏)
着用による安心感	着用による安心感	・着用しないと心もとない (A氏) ・着用すると安心感がある (A氏)
配色に対する外観性への期待	配色に対する外観性への期待	・様々な色があると楽しめる (C氏)

2) 弾性着衣の使用に対する改善の工夫 (表3)

弾性着衣の使用に対する改善の工夫では、【着用時の引き上げを楽にする】【疼痛を緩和する】【皮膚を保護する】【暑さに対処する】【睡眠時の負担を軽減する】【圧迫力を維持する】【費用を抑える】の7つのカテゴリが抽出された。

【着用時の引き上げを楽にする】では、参加者は「一気にギューじゃなくて、折って上げていく」など<折り曲げ、ゆっくりと引き上げる>方法を獲得していた。また、「(患者会の) セミナーで誰かにゴム手袋したらいいよって言われて、それから(中略)ゴム手袋なしで(弾性ストッキング)は履けない」などと<引き上げ時の負担を軽減させる>工夫をしていた。さらに、「(夏だと)冷風機に当てながら履く」など<汗を乾かしながら引き上げる>ことをしていた。

【疼痛を緩和する】では、参加者は「一番初めはもっと(着

圧が) キツイ、高いんですけどお値段も、それ着けてましたね。それでだんだん痛いし高いしって(医師に) 文句言っていたら一つ柔らかいのにしてくれました」と<圧迫の痛みを医師に伝える>ことをしていた。「本当に(圧迫が) キツイので、やっぱりずっとお料理とかしていても肘が痛くなってきてどうしても(腕を) 伸ばさなきゃいけない」など<痛い時には腕を伸展させる>ことや、「(痛い時の) 料理は時間をかけずに、自分に無理させずに」と<家事は短時間でやり無理しない>工夫をしていた。

【皮膚を保護する】では、「(皮膚の乾燥がひどくて) それで相談して(中略)、今は皮膚科の先生から(クリームを) 出してもらってます」と<皮膚乾燥について医師に相談する>ことをしていた。また、「(弾性) スリーブで皮膚ももう硬くなって(中略)、最初ここにコットンとか切つてとか、

表3 弾性着衣の使用に対する改善の工夫

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的なコード
着用時の 引き上げ を楽にする	折り曲げ、ゆっくりと引き上げる	・スリーブを折って上げていく (A氏) ・スリーブは一気に上げず、少しずつ引っぱりながら上げる (B氏)
	引き上げ時の負担を軽減させる	・1枚のスリーブは滑る感じだが、もう1枚のスリーブは単独で履くときつく、上げづらい感じがあるため、2枚着用する (C氏) ・患者会で紹介されたゴム手袋を使用して着用すると楽に引き上げられる (E氏)
	汗を乾かしながら引き上げる	・夏は冷風機にあたりながら履く (F氏) ・汗をかく前に着用する (A氏)
疼痛を 緩和する	圧迫の痛みを医師に伝える	・最初は圧迫がきつくて痛く、高額だったが医師に伝えて変更する (A氏)
	痛い時には腕を伸展させる	・着衣の引き上げによって手が痛い時は手を休める (F氏) ・肘の屈曲時に痛くなったら伸ばす (C氏)
	家事は短時間で行き無理をしない	・水仕事時にゴム手着用やスリーブの先を折って短時間で行う (C氏) ・着衣の引き上げによって手が痛い時は料理に時間をかけず、自分に無理させない (F氏)
皮膚を 保護する	皮膚乾燥について医師に相談する	・皮膚の乾燥を医療者に相談し、皮膚科の保湿剤を使用する (F氏)
	皮膚の摩擦を避けるために保護する	・スリーブの摩擦部分にコットンやガーゼをつける (C氏)
暑さに 対処する	気温により2種類を使い分ける	・夏は暑く我慢できないため、圧迫力の強いストッキングから圧迫力が普通の薄いものを履く (F氏)
睡眠時の 負担を 軽減する	就寝中に屈曲しないよう気を付ける	・就寝時には腕をまっすぐにするように気を付ける (C氏)
	就寝時は弾性包帯に変更する	・腕も曲がらず不便なので就寝時のみ弾性包帯を着用する (B氏)
圧迫力を 維持する	外出用に履き替えを携帯する	・洗濯した物は履きやすいが、一度脱ぐと生地がたるむため外出時は履き替えを携帯する (F氏)
	医療者の意見を取り入れ買い替える	・自分ではそう思わなくても、スリーブが伸びていると医療者に言われ何枚も買う (B氏)
費用を 抑える	費用を考慮し購入枚数を検討する	・購入手続きが大変なものもあり、少し伸びても我慢して1年に1回の購入にする (D氏) ・履き替え用として高額なものを保険適用にし、安いものを自費で購入する (F氏)

あとはガーゼとか付けてました」とく皮膚の摩擦を避けるために保護する>ことに対応していた。

【暑さに対処する】では、「(今使用しているのはスイス製の弾性着衣だが)暑くて我慢できないので夏場だけこれ(日本製を使う)」というように<気温により2種類を使い分ける>ことで暑さ対策を行っていた。

【睡眠時の負担を軽減する】では、「寝る時はもう本当に手をピタって(体に)つけて、まっすぐな感じで寝てますね」とく就寝中に屈曲しないよう気を付ける>ことや<就寝時は弾性包帯に変更する>工夫をしていた。

【圧迫力を維持する】では、「一回脱いだら同じものを履けないんですよ。だから必ずどこかで脱いだら、必ず(別な弾性着衣に)履き替える」とく<外出用に履き替えを携帯する>ことを語っていた。また、「(理学療法士にみてもらうと)やっぱり伸びていたのでもちも買いました。でも見た目では伸びてないかなって。私の素人考えではね」とく<医療者の意見を取り入れ買い替える>ことに対応していた。

【費用を抑える】では、「全然値段が違うので、(安い弾性着衣を)自腹にして買っているんです」と語り、<費用を考慮し購入枚数を検討する>ことに対応していた。

V. 考察

本研究では続発性リンパ浮腫を患った女性の弾性着衣の使用に伴う影響と改善の工夫についてカテゴリを抽出した。抽出した両方のカテゴリについて、1. 身体的な影響と改善の工夫、2. 日常生活への影響と改善の工夫の2つの視点からカテゴリ間の関係性も含めて考察し、リンパ浮腫患者への生活支援について検討する。

1. 弾性着衣の使用による身体的な影響と改善の工夫

研究参加者は、弾性着衣の【着用による手指や関節への負担】や【着用による皮膚への負担】といった身体的な影響を体験しており、【着用時の引き上げを楽にする】【疼痛を緩和する】【皮膚を保護する】【睡眠時の負担を軽減する】といった改善の工夫をしていた。

まず【着用による手指や関節への負担】には、【着用時の引き上げを楽にする】【疼痛を緩和する】という工夫で対処していたと考える。本研究で特徴的であったのは、弾性着衣の引き上げが手指に負担をかけていたことである。日本リンパ浮腫学会¹²⁾では、弾性着衣について着用が大変

で時間も要するとし着脱時の補助器具を紹介しているが、手指自体に負担がかかることの報告は見当たらない。本研究では参加者の補助器具の使用について確認をしていないが、施設からではなく患者会の会員からゴム手袋を紹介されく引き上げ時の負担を軽減させるという工夫をしていたことから、リンパ浮腫治療施設によって着用時の引き上げに対する教育支援が十分ではない可能性が伺える。現在はリンパ浮腫療法士などの育成も行われている¹³⁾ことから施設間で統一した指導の充実に加え、手指の負担を軽減する引き上げ方法の検討が期待される。

また、研究参加者はく家事は短時間でい無理をしないくやく痛い時には腕を伸展させるくという方法で疼痛を緩和していた。【着用による皮膚への負担】には、【皮膚を保護する】ことで対処していたと考える。一方で、参加者は手指の疼痛や関節の負担、皮膚のトラブルがあったことを語っており、“キツイけども着用し続け、だんだん痛くなってから医師に言った”や“皮膚の乾燥がひどくなってから相談した”など症状が悪化してから医師に相談していたことが伺える。これより医療者は、弾性着衣の着用によって手指・関節の疼痛や皮膚への負担が出現しやすいことを念頭に生活を視点を質問をする機会を設け、症状が悪化する前に解決策を共に見出す支援が必要であると考え。リンパ浮腫の複合的治療に対する患者のアドヒアランスを高めるためには、医療者とのパートナーシップが欠かせないことが示されている¹⁴⁾ことから、患者が主体的に身体状況を管理し、医療者と協働することも必要であるといえる。加えて、く動作による皮膚の食い込みくに対しては、く睡眠中に屈曲しないように気を付けるくといった【睡眠時の負担を軽減する】工夫も重要になると考える。弾性着衣は手・肘関節や足・膝関節の長時間の屈曲姿勢、睡眠中の着衣の食い込みに注意する必要がある。不適切な着用はリンパ浮腫を悪化させる可能性がある⁸⁾。そのため、患者が安全に弾性着衣を着用し、十分な睡眠を確保できるように適切な指導が求められる。

2. 弾性着衣の使用による日常生活への影響と改善の工夫

研究参加者は、弾性着衣の【着用による日常生活への支障】【着用継続による経済的負担】【着用による安心感】【配色に対する外観性への期待】といった日常生活への影響を体験しており、【暑さに対処する】【圧迫力を維持する】【費用を抑える】といった改善の工夫をしていた。

まず【着用による日常生活への支障】のく着用による異常な暑さくには、冷風機の活用や汗をかく前に着用するなど【暑さに対処する】といった工夫をしていたと考える。しかし、今後世界的にも地球温暖化により気温は上昇することが懸念されている¹⁵⁾ため、気温に応じた着用方法の検討が必要であるといえる。

【着用継続による経済的負担】には、【費用を抑える】ことで対処していたと考える。一方で、【着用継続による経済的負担】はリンパ浮腫治療の継続や生活自体を脅かす可能性も

あり重要な視点といえる。がん治療は、医療費の支払いや治療に伴う休職など経済的負担が大きくなる。その蓄積は、患者の生活の質（Quality of Life：以下QOL）を低下させることさえある¹⁶⁾。現在わが国では、診療報酬の改定⁶⁾により弾性着衣が保険適用になったが、洗い替えや就寝用などを考慮した実質的な枚数の検討と共に、続発性リンパ浮腫患者の具体的な経済的負担に対する調査も必要であると考え。

今回、負の影響だけではない心理的变化として【着用による安心感】【配色に対する外観性への期待】が抽出されたのは特徴のひとつといえる。【着用による安心感】には、【圧迫力を維持する】工夫で安定した着圧を保持することが期待できる。一方で、研究参加者は安心感と共に“着用していないと心もとない”とも語っており、弾性着衣が心理面にも影響することが推察される。実際、リンパ浮腫患者は浮腫の予防策や治療法を毎日実施しなければならないため、生活に影響を及ぼしていることに加え、精神的苦痛やうつ病などの精神疾患の罹患率が高くなることが示唆されている¹⁷⁾。そのため、医療者は毎日着用する弾性着衣が生活に及ぼす影響について考慮し、患者の心理面にも留意しながら関わる必要があると考える。また、【配色に対する外観性への期待】では、弾性着衣を着用しながらも患者個々に適した自分らしい配色を楽しめることも重要である。国ではアピアランスケアの充実に掲げている¹⁸⁾ことから今後の検討課題であるといえる。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は1つの患者会に対し実施したため結果に偏りがある可能性がある。また、乳がんと婦人科がんでは着用する弾性着衣に相違があること、治療歴や闘病歴に相違があるため個人差が生じることが考えられる。今後は、参加者や治療歴などの条件を考慮し、検討する必要がある。さらに、本研究結果を基に質問紙調査などで広く患者が体験している影響を明らかにし、患者の生活に即した支援方法の確立に繋げていく必要がある。

VI. 結論

続発性リンパ浮腫を有する女性患者の弾性着衣の使用による影響と改善の工夫は、身体的な影響と日常生活への影響に大別でき、影響として6カテゴリ、改善の工夫として7カテゴリが抽出された。特に身体的な影響では弾性着衣の引き上げによる手指の負担が示されており、今後は支援方法の確立や負担を軽減した着用方法の検討が必要である。日常生活への影響に対しては、QOLが低下しないよう暑さ対策や睡眠の確保、経済的負担、心理面や外観性に対する支援の必要性が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力頂いた患者様に心より感謝申し上げます。本研究は、JSPS科研費18K10277の助成を受け実施し、内容の一部を第4回日本緩和医療学会北海道支部学術集会において発表した。本研究に関して開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 国立がんセンター：がん情報サービス 最新がん統計. 2019, https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html#anchor2, (2023-08-25)
- 2) 日本リンパ浮腫学会編：センチネルリンパ節生検によって腋窩郭清を省略した乳癌患者に対して、リンパ浮腫ケアは必要か？. リンパ浮腫診療ガイドライン2018年版. 東京, 金原出版, 2018, p33-35
- 3) 日本リンパ浮腫学会編：タキサン系薬剤は続発性リンパ浮腫発症の危険因子か？. リンパ浮腫診療ガイドライン2018年版, 金原出版, 東京, 2018, p61-64
- 4) Lee TS, Kilbreath SL, Refshauge KM, et al: Prognosis of the upper limb following surgery and radiation for breast cancer. *Breast Cancer Res Treat* 110(1): 19-37, 2008
- 5) 濱西潤三, 井沢知子：下腿浮腫による痛み・苦痛の緩和. *がん患者と対症療法*27(1): 36-42, 2018
- 6) 厚生労働省：令和4年度診療報酬改定について 診療報酬の算定方法の一部改正に伴う実施上の留意事項について. *医科診療報酬点数表に関する事項*. 2022: 436, <https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000984041.pdf>, (2023-08-25)
- 7) 北村薫：リンパ浮腫の診断, 予防と治療. *medicina*60 (8) : 1268-1272, 2023
- 8) 小川佳宏：リンパ浮腫と圧迫療法. *日本フットケア・足病医学会誌*1(3): 125-131, 2020
- 9) 沖田翔平, 木下幸子, 臺美佐子他：マーカー有り医療用弾性ストッキングが履かせやすさ, ねじれ, 皮膚に与える影響. *リンパ浮腫管理の研究と実践LYMPH RAP*7(1): 20-28, 2019
- 10) 近藤さえ子, 伊藤礼子, 伊藤まさ江：弾性包帯や弾性着衣による圧迫が困難な患者に対する筒状包帯とウェーブスポンジ併用による弱圧圧迫治療効果の検討. *Palliative Care Research*10(2): 124-129, 2015
- 11) Kärki A, Anttila H, Tasmuth T, et al: Lymphoedema therapy in breast cancer patients: a systematic review on effectiveness and a survey of current practices and costs in Finland. *Acta Oncol*48(6): 850-859, 2009
- 12) 日本リンパ浮腫学会：リンパ浮腫の治療 5)弾性着衣. https://www.js-lymphedema.org/?page_id=684, (2023-08-28)
- 13) 重松宏：我が国のリンパ浮腫の現状とリンパ浮腫療法士の育成, そして日本リンパ浮腫治療学会の設立. *日皮会誌*129(9): 1871-1876, 2019
- 14) 井沢知子, 荒尾晴恵：がん治療後のリンパ浮腫をもつ患者における複合的治療のアドヒアランスの概念分析. *日本看護科学会誌*38: 169-175, 2018
- 15) 文部科学省気象庁：日本の気候変動2020 -大気と陸・海洋に関する観測・予測評価報告書-. 2020, https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/2020/pdf/cc2020_honpen.pdf, (2023-08-28)
- 16) Meneses K, Azuero A, Hassey L, et al.: Does economic burden influence quality of life in breast cancer survivors? *Gynecol Oncol*124(3): 437-443, 2012
- 17) McWayne J, Heiney SP: Psychologic and social sequelae of secondary lymphedema: a review. *Cancer*104(3): 457-466, 2005
- 18) 厚生労働省：がん対策推進基本計画. 2023: 45-45, <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001138884.pdf>, (2023-08-28)